

氏 名	赤堀 裕之史		
学位の種類	博士（音楽）		
学位記番号	博音第13号		
学位授与年月日	令和2年3月25日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当者		
題 目	学位論文題目	キー・トランペット—その歴史と意義・可能性	
学位論文等 審査委員	(演奏審査)	主 査 特任教授	杉 木 峯 夫
		副 査 教 授	熊 谷 恵 美 子
		副 査 教 授	久 留 智 之
		副 査 教 授	井 上 さ つ き
		副 査 教 授	倉 田 寛
	(論文審査 及び最終 試験)	主 査 特任教授	杉 木 峯 夫
		副 査 教 授	井 上 さ つ き
		副 査 教 授	久 留 智 之
		外 部 審査員 教 授	和 田 美 亀 雄 (弘前大学)
学 位 論 文 の 要 旨			
<p>18 世紀後半に開発されたキー・トランペットはそれまで用いられていたナチュラル・トランペットの次の世代の楽器として生み出された。ナチュラル・トランペットでは演奏不可能であった自然倍音列以外の音を演奏するために、当時、様々な楽器が生み出されたが、キー・トランペットはそのような楽器の 1 つである。キー・トランペットは、ヴァルヴ式トランペットの出現により普及しなかった楽器であるが、現在においても様々な場所で演奏されているハイドン Joseph Haydn (1732-1809) やフンメル Johann Nepomuk Hummel (1778-1837) のキー・トランペットのために書かれた協奏曲は、当時キー・トランペットを演奏していたトランペット奏者ヴァイディンガー Anton Weidinger (1766-1852) により委嘱されたものである。近年、これらの協奏曲は、オリジナルの楽器であるキー・トランペットを用いて演奏される機会も多くなった。</p> <p>最近の研究は、レーヌ Dahlqvist Reine (1945 -) の著書『<i>The Keyed Trumpet and its greatest Virtuoso, Anton Weidinger</i>』(1975)や、タール Edward Tarr (1936 - 2020) の『<i>Hummel Concerto a Tromba principale Einführung Historische Betrachtung Analyse Kritischer Kommentar Original-Solostimme</i>』(2010)、ルーチェク Jaroslav Rouček (1970 -) の論文『<i>Chromaticism of brass musical instruments in the first half of the 19th century - instruments fitted with a key mechanism</i>』(2012)、セクストン Jeremy W. Sexton 『<i>Anton Weidinger and the Emergence of His Voice: The Keyed Trumpet</i>』(2015) などが発表され、キー・トランペットの構造やアントン・ヴァイディンガーの歴史を明らかにする研究が進められている。</p>			

一方で、キー・トランペットのために書かれた作品において、キー・トランペットの演奏技術に焦点をあてた研究は少ない。本論では、キー・トランペットの歴史、構造、演奏技術を精査し、その特徴を見出すことにより、キー・トランペットのために書かれた作品である、ハイドン《協奏曲 変ホ長調 Hob. VIIe:1 *TrompetenKonzert*》(1794)、コジェルフ Leopold Kozeluch (1747-1818)《協奏交響曲 変ホ長調 (トランペット・ピアノ・マンドリン・コントラバスのための) *Sinfonia concertante Es-dur für Mando line, Klappentrompete, Kontrabass, und Klavier mit Orchesterbegleitung*》(1798) フンメル《協奏曲 ホ長調 *Concerto a Tromba principale*》(1803) の本来の音楽表現を検討していった。

本論は、全4章で構成される。第1章ではキー・トランペットの歴史と変遷を概観する。18世紀後半はナチュラル・トランペットが衰退し、新しいトランペットが発明されていた過渡期であり、スライド・トランペットや、ストップ・トランペットなどの新しい機構を持ったトランペットが発明されている。キー・トランペットもその中の1つである事が確認された。その目的は、バロック時代に用いられていたクラリーノ奏法による高い倍音列のみで演奏することができる半音階を、低い倍音列でも演奏することであった。

第2章では、ナチュラル・トランペット、キー・トランペット、ヴァルヴ式トランペットの構造比較の考察とヤマハ株式会社との共同研究実験の結果と考察を報告した。それぞれのトランペットの構造を比較したことにより、キー・トランペットに付いているキーは、ピッチ補正の為だけでなく半音階を演奏することができる機構であることを確認することができた。さらにナチュラル・トランペットの要素が含まれていることがわかった。その結果、ヴァルヴ式トランペットに比べ、他の楽器とよく調和することが明らかになった。

ヤマハ株式会社との共同研究により、より詳細なキー・トランペットの構造を知ることができた。測定したデータによると、キーの開放による吹奏感の損失はそれほどなく、音程の癖も演奏可能なレベルであることから、キー・トランペットは現代の楽器と比べても、遜色のない楽器であるということが明らかになった。今回の実験で、音色については省かれているが、共鳴の視点から現代の楽器との共通点も確認することができた。

第3章では、基礎演奏技術の違いを検討するために、ナチュラル・トランペットのために書かれたアルテンプルクの教則本、ナチュラル・トランペットとキー・トランペットの両方のことが書かれているロワの教則本、現在、もっとも普及しているヴァルヴ式コルネットのために書かれたアーバンの教則本を使用した。これらを比較したことにより、トランペットにおけるタンギングや呼吸などの基礎演奏技術を演奏者自身が改めて見直し、楽譜に書いていない表現にまで意識をむけなければならないということを見出した。

第4章では、今までの章で見出された成果をもとに、キー・トランペットのための協奏曲であるコジェルフ、ハイドン、フンメルの3つの協奏曲を検討した。

ハイドンのトランペット協奏曲では、バロック時代に用いられていたクラリーノ奏法と新しい表現である半音階を譜例とともに示し、その斬新さを明らかにした。コジェルフの協奏交響曲では、初めてキー・トランペットが披露された曲であることを指摘し、その特異な編成や譜面から、当時、注目されていた楽器の一つであったことがわかった。

フンメルのトランペット協奏曲では、特に3楽章において、現在演奏されているヴァ

ルヴ式トランペットのための音楽表現ではなく、キー・トランペットが持つ独自の音楽表現を理解し検討することで、当初、作曲家が求めたであろう音楽を再現することができた。また、キー・トランペットの構造をもとに研究することで、音楽表現の新しい可能性を示すことができた。

これらの検討から、本来はキー・トランペットのために書かれたこれらの協奏曲を演奏するにあたり、現代のヴァルヴ式トランペットとの相違性を認識し演奏に取り入れることで、現代におけるキー・トランペットの存在意義を見出すことができた。

演奏審査結果の要旨

G. ファンティーニ（現在発見されている最も古い教則本を書いたトランペット奏者）の「8つのソナタ」から第一番を演奏した。赤堀君の演奏は均等で正確な発音により、自然倍音列のみで奏されるナチュラル・トランペットの特徴を生かし明るく安定した演奏であった。

J. ハイドンの「協奏曲」変ホ長調は、ハイドンの代表作でキー・トランペットのために作曲された。トランペット奏者の重要なレパートリーとして演奏されている。第一楽章はナチュラル・トランペットと比較してとても和らかい音で演奏され、最高音の Mi \flat の音も華やかに美しい音で表現されていた。一楽章終わりのカデンツは、低音・高音ともに安定した演奏であったが、不慣れなキー操作の影響を受けてか不正確な音もわずかに発せられていた。第二楽章ではキー・トランペットの特徴がよく生かされて柔らかく心地よい演奏であった。第三楽章は16分音符が連続して高度なテクニックが求められるが、速いテンポで演奏されるオクターブの跳躍も安定していた。

S. R. ノイコムの間奏曲「レクイエム」はウイーン会議でルイ16世追悼のために演奏された曲で、ヴァイディンガーとキー・トランペットを世に広く知らせるために演奏された。オリジナル編成は、ホルン四重奏とキー・トランペットであるが、ピアノ伴奏に編曲して演奏した。キー・トランペットのための数少ない貴重な作品であるが、オリジナルでの再演を願う。

フンメル「四重奏曲ホ長調」は、フンメルがエステルハージ家の宮廷楽長の任に就いていた頃の作品で、トランペットのパート譜は現在出版されている協奏曲と同じであるが、当時はキー・トランペットとピアノ、ヴァイオリン、チェロで演奏された。第一楽章は三連音符の高らかなファンファーレで始まり、途中からはキー・トランペットが得意とする新しい試みが随所に見られ、ハイドンの協奏曲よりもキーの数を増やす必要があり、キーが増えることでより高度なテクニック求められるが、安定して美しい響きで演奏されていた。第二楽章は静かな音量と確かな演奏技術によって美しいメロディーが表現されていた。第三楽章は現在一般的に演奏されているテンポよりも遅いテンポで演奏することでターンやトレモロが安定して表現されていた。

プログラムの最後は J. B. アーバンの「幻想曲と変奏」をコルネットで演奏した。アーバンはパリ国立高等音楽院を卒業した数年後に3本のヴァルヴ式コルネットのための教則本を出版した。この頃を境にヴァルヴ式コルネットの時代を迎えることになる。赤堀君の表情豊かで安定したコルネットの演奏でリサイタルを閉じた。

プログラム構成、演奏ともに質の高い内容であった。博士論文のテーマに沿ってトラン

ペットの歴史を振り返り、ナチュラル・トランペット、キー・トランペット、ヴァルブ式
コルネットの特徴説明しながら演奏した。しかしキー・トランペットの構造についての説
明がやや不足しており、これを補うための工夫が必要であった。例えば、キー・トランペ
ットと現代のトランペットで同じフレーズを演奏することで、音の違いがより理解しやす
かったのではないかと、との指摘もあった。キー・トランペットの歴史と構造からみる表現
方法を研究することによって得られたことは、キー・トランペットの柔らかい音色は少数
の弦楽器とも調和すること、簡単な構造の楽器であるにもかかわらず、ハイドンとフンメ
ルの協奏曲を演奏できた体験など、赤堀君の「学位審査リサイタル」に相応しい内容であ
った。

論文審査結果の要旨

過去の楽器として現代では消滅しかけていたキー・トランペットに関し様々な角度から
論拠を示してその存在意義と復権を説いている。

本論文はトランペットの起源であるナチュラル・トランペットから現在のヴァルブ式ト
ランペットに至るトランペットの開発・発展の歴史の中で、衰退してしまったキー・ト
ランペットの演奏技術表現の可能性とその価値を模索し探求した研究である。

ハイドンとフンメルの協奏曲は現在ピストン・トランペットやロータリー・トランペ
ットで演奏されているが、当時は半音を奏することが可能となる様々な楽器が作られており
いわば楽器製作の過度期であった。

キー・トランペットの性能を試すために作られたと思われるコジェルフの協奏交響曲か
ら、ハイドンとフンメルによって次第にキー・トランペットとしての性能が高められた、
との推論は評価できる。フンメルの自筆譜の中には協奏曲の完成まで、作曲家と演奏家の
やり取りが興味深く述べられている。

また楽器メーカーとの共同研究により得られた科学的な検証も本論の論拠として有効
であると考えられる。ヤマハ株式会社の技術を用いてキー・トランペット内部の共鳴を測定し
これを数値化した。当時の楽器としては完成度が高く製作者の技量も相当高かったと推測
でき、キーの操作による穴の開閉による吹奏感も極端に変わらない。

更に、申請者自らがキー・トランペットを演奏することにより、その表現能力の可能性
や自身の研究の完成度を高めることで論旨を立証している点も高く評価できる。

最終試験結果の要旨

申請者に対する最終審査を行った結果、オーケストラ奏者として演奏活動をしながらの
研究成果は審査委員全員から高く評価された。

ヤマハとの共同研究による科学的な検証も本論の論拠として有効であり、本研究をさら
に深めることによって新たな楽器の誕生が期待される。

文章表現や用語の使用法など、論文執筆の技術的な問題があるものの、論文の独創性は
十分に認められる。

以上のことから本論文を博士の学位を授与するに値すると判断する。